

# ルクセンブルクにおけるフランス語使用拡大の背景： 外国人労働者の増加とルクセンブルク人の言語観

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科： 都市文化研究センター 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): ルクセンブルク, トリグロシア(三言語併用), 外国人居住者および労働者, フランス語のプレステージ, コミュニケーション言語 キーワード (En): Luxembourg, Triglossia, foreign residents and workers, prestige of French, communication language 作成者: 木戸, 紗織 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学, 四天王寺大学
URL	<a href="https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-058">https://doi.org/10.24544/ocu.20171213-058</a>

## ルクセンブルクにおけるフランス語使用拡大の背景

—— 外国人労働者の増加とルクセンブルク人の言語観 ——

木 戸 紗 織

### ◆要 旨

ルクセンブルク大公国は、ルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語の三言語を併用する多言語国家である。このうちフランス語はおもに公的機関などの領域で用いられ、日常的に用いられることは稀であった。だが、近年では外国人とのコミュニケーションのためにあらゆる領域で使用されていることが先行研究で指摘されている。ルクセンブルクの外国人比率は43.8%と非常に高く、これに加えて人口の3割に相当する労働者が隣国から通勤している。そのため、昼間人口では外国人がルクセンブルク人を上回る。このような環境から、ルクセンブルク人は、自らが相手の言語に合わせることで複雑なコミュニケーションを回避しようと努めているが、外国人労働者の大半がロマンス語圏出身者であることから、結果としてフランス語の使用頻度が急激に高まっている。今日フランス語は、ルクセンブルクにおけるリングア・フランカとなりつつある。

このような外国人労働者からの視点に対し、本稿では、ルクセンブルク人の視点から見たフランス語使用について論ずる。ルクセンブルクのフランス語には、公的な言語として認識されていること、フランス語の能力が一種の社会的ステータスとなっていること、格調が高く洗練された言語とみなされていることが確認される。これらの理由からフランス語は高いプレステージを有しており、ルクセンブルク人はフランス語に対して好意的な言語観を持っている。これとは対照的に、ルクセンブルク語に対する評価は決して高くない。ルクセンブルク語は母語であり国家の独立の象徴とみなされている半面、専門的な語彙や抽象表現が十分に整備されておらず、教育システムにも問題を抱えている。そのため、ルクセンブルク人と外国人の媒介言語とするには未だ不十分である。このことも、ルクセンブルク人のフランス語使用を後押ししている。つまり、ルクセンブルク人はフランス語使用に肯定的であり、自身のフランス語能力を示すことに積極的なのである。

このように、ルクセンブルク人が外国人とコミュニケーションをとる際、通常は対話者から要求されるという外的な要因のみであるが、フランス語の場合のみ、ルクセンブルク人の側から生じる内的な要因も存在する。したがって、ロマンス語母語話者を多く含む外国人労働者の増加がフランス語使用の拡大の直接的な原因であるとしても、ルクセンブルク人自身も、フランス語の使用に強い動機を持っているのである。

キーワード：ルクセンブルク、トリグロシア（三言語併用）、外国人居住者および労働者、フランス語のプレステージ、コミュニケーション言語

(2013年9月10日論文受理, 2013年11月8日採録決定 『都市文化研究』編集委員会)

### はじめに

ルクセンブルク大公国 (Groussherzogtum Lëtzebuerg, Grand-Duché de Luxembourg, Großherzogtum Luxemburg) は、ルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語の

三言語を公用語としている。このうちフランス語は近年とくに使用が増加しているとされ、外国人<sup>1)</sup>労働者と関連付けて語られる。ルクセンブルクの人口に占める外国人の比率は43.8%にも上り、その多くがポルトガルをはじめとするロマンス語圏出身者である。その上、隣接す

る三国のうちフランスからの越境通勤者が全体の49.9%を占めている<sup>2)</sup>。したがって、外国人労働者の大半がロマンス諸語を母語としており、その言語的近さからルクセンブルクにおいてはフランス語を頻繁に用いているとされる。元来、三言語は領域(domain)によって使い分けられており、フランス語はおもに公的機関などで用いられ、日常的に用いられることは稀であった。だが、近年では外国人とのコミュニケーションのために領域を超えてあまねく使用されつつある。そのため、場合によってはルクセンブルク人より多数派になりうる外国人労働者が、フランス語の使用頻度を押し上げていることが多くの先行研究で指摘されている<sup>3)</sup>。

これに対し、ルクセンブルク人のフランス語使用についてはほとんど取り上げられることがなかった。そこで本稿では、ルクセンブルク人の側から見たフランス語使用について分析する。まず第1章では、伝統的な三言語併用から近年の外国人労働者との媒介言語まで、ルクセンブルク人の言語使用について述べる。続く第2章にて、外国人労働者の増加に伴いフランス語がルクセンブルクのリングア・フランカとなっていることを確認する。第3章では、ルクセンブルク社会におけるフランス語の地位とルクセンブルク人の心理に着目し、外国人労働者だけでなく、ルクセンブルク人の側にもフランス語使用を増加させる要因があることを明らかにする。分析に際しては、言語調査であるバレエヌ調査(*Le Sondage "baleine"*)の結果を中心に、先行研究と比較して独自の視点から再解釈を行い、従来指摘されることのなかったフランス語使用に対するルクセンブルク人側の働きかけについて論証する。

## 1. 各言語の特徴と使い分け

### 1.1 三言語併用の成立過程

ルクセンブルク大公国は首都も同名のルクセンブルクといい、ドイツ、フランス、ベルギーと国境を接している。伯爵領として始まった同国は徐々に領土を拡大し、4名の神聖ローマ皇帝を輩出した他ボヘミアやハンガリーの王位を得るほどに勢力を伸ばすが、1443年にブルゴーニュ公国の支配下に組み入れられて以降は、ネーデルラント、フランス、ドイツと周辺国の間を転々とし、ようやく1839年に国土の西半分を割譲した上で独立を果たす。ルクセンブルクにおいてルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語が併用されるようになった背景には、一つにこの歴史的な要因がある<sup>4)</sup>。

加えて、意図的に複数言語使用が維持されたという側面もある。独立以前のルクセンブルクは、東部のドイツ語地域と西部のフランス語地域の二つから成っていた。

ドイツ語地域では一般的にドイツ語のルクセンブルク方言が話されていたが、行政語としてはフランス語が用いられていた。一方、フランス語地域ではもっぱらフランス語しか使われていなかったため、人口的にはドイツ語地域のほうがやや多かったにもかかわらず、言語的にはフランス語話者のほうが多かった(トラウシュ 1999: 71)。そもそもルクセンブルクのフランス語はブルゴーニュ公国支配下で導入され、さらに1795年以降のフランス統治下で指導者層におけるフランス語の地位が強化されたという経緯がある。そのため、これが後々の行政語としてのフランス語に大きく影響しており、当時は第一公用語としてフランス語が、第二公用語としてオランダ語が用いられていた<sup>5)</sup>。ところが、1830年のベルギー革命とその後のロンドン条約によってルクセンブルクは二分され、東のドイツ語地域をオランダに残し、西のフランス語地域<sup>6)</sup>をベルギーに割譲することが決められる。今日のルクセンブルクは前者にあたる。この分割線は基本的に言語境界線に沿って引かれたため、これ以降ルクセンブルクはドイツ語地域のみとなるが、正確には、話しことばとしてはドイツ語のルクセンブルク方言が、書きことばとしてはドイツ語が用いられるというダイグロシア状態であった。ところが、もはや母語話者がいないにもかかわらず、引き続きフランス語が公式な言語として使用される。ドイツ語系の住民に対してフランス語が初等教育の必修科目とされ、1848年以降の諸憲法では「ドイツ語およびフランス語の使用は選択的であり、使用は制限されてはならない」と定められている。フランス語は、地域としては失われたが、機能として残されたのである(Neuhausen 2001: 13)。そのため、教会活動や新聞などの庶民生活に結び付いた領域ではドイツ語が優勢であり、行政、司法の分野に加え高等文化面ではフランス語が支配的であった(トラウシュ a.a.O.: 95)。トラウシュは、このフランス語の維持に対する当時の政府の姿勢を抜きにして、現在のルクセンブルクは語れないとまで述べている(ebd.)。

以上のような経緯から、三言語は無作為に用いられるのではなく、それぞれに使い分けられている。トラウシュは「話しことばとしてのルクセンブルク語、書きことばとしてのドイツ語、公的言語としてのフランス語」と表現している(ebd.: 108)。これに対しギレス(Gilles)は、ルクセンブルク語が口頭コミュニケーションの中心的なメディアであり、ドイツ語とフランス語が複雑な体系に基づいて書きことばの分野を分担しているとみなしている。ただし、このことはルクセンブルク語話者同士のコミュニケーションにのみ当てはまり、非ルクセンブルク語話者がコミュニケーションに参加する場合にはフランス語を用いる傾向があるとしている(2009b: 189)。ゲッツィンガー(Goetzinger)も、フランス語とドイツ語

は書きことばとして共に支配的な言語（kodominante Sprachen）であるとしている（2003: 46）。一方フェーレン（Fehlen）は「話しことばとしてのルクセンブルク語，書きことばとしてのドイツ語，フランス語」という考え方を誤った二分化であると批判し，この分類に上位および下位変種という概念を加えて，重層的な分類を提唱している（2009: 47ff）。彼の指摘によれば，フランス語は書きことばの上位変種としてのみ用いられ，下位変種としてはドイツ語とルクセンブルク語が補完し合いながら用いられる。話しことばには，上位変種としてルクセンブルク語および必要に応じてその他の言語が，下位変種としてルクセンブルク語の地域方言が相当するとしている。ルクセンブルクの言語状況は研究者によって見方が異なるが，ルクセンブルク語がルクセンブルク人の話しことばであり，ドイツ語が書きことばであり，フランス語が他の二言語に比べて公的な性格を有しているとの見方では一致している。

法的には，1984年制定の言語法<sup>7)</sup>により，行政と司法でフランス語，ドイツ語，ルクセンブルク語の三言語が使用可能とされている。だが，法律に関してはフランス語でのみ起草される。また，ルクセンブルク語が国語（langue national）である旨，明記されている。ドイツ語は，第二次世界大戦中ドイツによって占領されたことから，一時期公用語から除外することが検討された。しかし，伝統的にドイツ語が担ってきた役割を他の言語に置き換えることは困難だと判断され，今日も公用語として認められている。以上が，ルクセンブルクの三言語併用（Triglossie）である。

## 1.2 外国人とのコミュニケーションにおける三言語

本来ルクセンブルクでは三言語が場面によって使い分けられるが，外国人とのコミュニケーションにおいてはこの使い分けが存在せず，一貫して相手の言語に合わせる（Goetzinger 2003: 48）という原則に則っている。国語であり母語であるルクセンブルク語も，立法の言語であるフランス語も，大戦中敵国の言語であったドイツ語も，外国人とのコミュニケーション言語としては等価値であり，相手の必要に応じて用いられる。ゲッツィンガーは，ルクセンブルク人の特性である三言語主義（Trilingualismus）がルクセンブルク人の母語であり，多様性（Diversität）がアイデンティティの基礎となると述べている（2003: 52）。ここまでは楽観的な見方はできないとしても，三言語性（Dreisprachigkeit），もっと言えば多言語性（Mehrsprachigkeit）がルクセンブルク人エリートの実際の母語である（Fehlen 2012: 46, 傍点は筆者）ということは言えるであろう。自国内で外国語を用いることに積極的であるというこの姿勢からは，

言語的多様性を体現する国際人的な在り方が実はナショナル・アイデンティティになっているという，一種のねじれ現象が読み取れる。

## 2. 外国人労働者とフランス語使用

ギレスは非ルクセンブルク語話者とフランス語の関係に言及しているが，ノイハウゼンも，今日のフランス語が公的な役所の言語である一方，ルクセンブルク人と外国人の媒介言語となっていることを指摘している。その理由として，外国人労働者の大半を占めるロマンス語圏出身者にとってルクセンブルク語やドイツ語より使いやすい点を挙げている（2001: 25f）。一方，ゲッツィンガーは，フランスやベルギーからのモノリンガルな越境通勤者<sup>8)</sup>の存在を挙げている。越境通勤者は，コミュニケーション上の障害を取り除くことだけを目的とすればわざわざルクセンブルク語を習得する必要はなく，場合によってはフランス語を話す方が有利になると指摘する（2003: 48）。つまり，ルクセンブルク国内あるいはその周辺に居住しルクセンブルクで働く非ルクセンブルク語話者の存在がフランス語の使用を強く要求していることが示唆されている。

### 2.1 外国人居住者

ルクセンブルクは19世紀半ばまで貧しい農業国であったが，鉄鋼床が発見されたのを機に急速に近代化し，その過程で多くの外国人労働者が移住した。最初に移住したのはドイツ人であり，第二次世界大戦までルクセンブルクに居住する最大の外国人集団であった。次いでイタリア人が1978年まで最大の集団となり，その後ポルトガル人がイタリア人を抜いて最大グループとなったまま現在に至っている（トラウシュ 1999: 91ff）。経済の中心が鉄鋼業から金融，IT産業へ移行した今日も，依然として多くの外国人労働者がルクセンブルク国内に居住している。2012年の時点で人口の43.8%を外国人居住者が占め，その内訳は37.1%がポルトガル人，14.3%がフランス人，以下イタリア人7.8%，ベルギー人7.4%，ドイツ人5.3%，イギリス人2.4%，オランダ人1.6%となっている<sup>9)</sup>。上位3か国はロマンス語圏であり，彼らが外国人居住者全体の59.3%を占めている<sup>10)</sup>。ロマンス諸語は言語的に同じ系統に属しており，今日もなお互いに似た特徴を有していることから，ロマンス語を母語とする者であれば，フランス語を理解することは比較的容易である。上述のギレスやノイハウゼンは，この状況を指してフランス語に外国人，すなわち非ルクセンブルク語話者とのコミュニケーション言語としての側面を認めているのである。

非ルクセンブルク語話者の割合は年々高まっており、若い世代ではルクセンブルク語話者を上回る事態となっている。教育省(Unterrichtsministerium)によると、2010年度、公立及び私立の学校に在籍する生徒数は85,646人であり、そのうちルクセンブルク人が58.3%、非ルクセンブルク人が41.7%であった。非ルクセンブルク人として最大のグループを形成しているのはやはりポルトガル人で、全生徒の23.1%を占めていた。非ルクセンブルク人生徒の割合は全人口に占める外国人の比率(43.8%)とほぼ同じであるが、全生徒に占めるポルトガル人生徒の割合は、全人口に占めるポルトガル人の割合(16%)よりもやや高くなっている。さらに小学校に限定すると、非ルクセンブルク人の割合は47.4%であるにもかかわらず、家庭でルクセンブルク語以外の言語を話しているという生徒は56.1%にも達する。国籍上はルクセンブルク人であっても、母語がルクセンブルク語ではないという生徒が少なからずいることが分かる。しかもルクセンブルク語母語話者と非ルクセンブルク語母語話者の割合は2007年度を最後に逆転しており、その差は年々拡大している。

からフランス語を学ぶ。ルクセンブルクの小学校における授業言語はドイツ語であるため、彼らはドイツ語を学びつつドイツ語で他の科目を学ぶことになる。高等教育ではフランス語が授業言語となり、高度な語学力を身に付けさせるとともに、これまでの既習言語を基礎として第3、第4外国語の習得を目指す。以上が、ルクセンブルクにおける語学学習のカリキュラムである。この制度はルクセンブルク語母語話者を前提としており、書きことばとして使われる機会の少ないルクセンブルク語に代わり、ドイツ語を識字言語として早期に定着させることを狙いとしている。ルクセンブルク語とドイツ語は系統が近いため、ルクセンブルク語母語話者であれば比較的容易にドイツ語を習得できると考えられるが、逆に非ルクセンブルク語話者の大半を占めるロマンス語母語話者にとっては不適切な学習方法であると言わざるを得ない。母語によるハンデ以外に、ルクセンブルク語母語話者は両親との会話やテレビ番組を通じてドイツ語を習得できる環境にあるが、ロマンス語母語話者は家庭でも母語やフランス語を多く使用する分ドイツ語との接点が限られるため、両者の差がより開くことになる。その結果、多

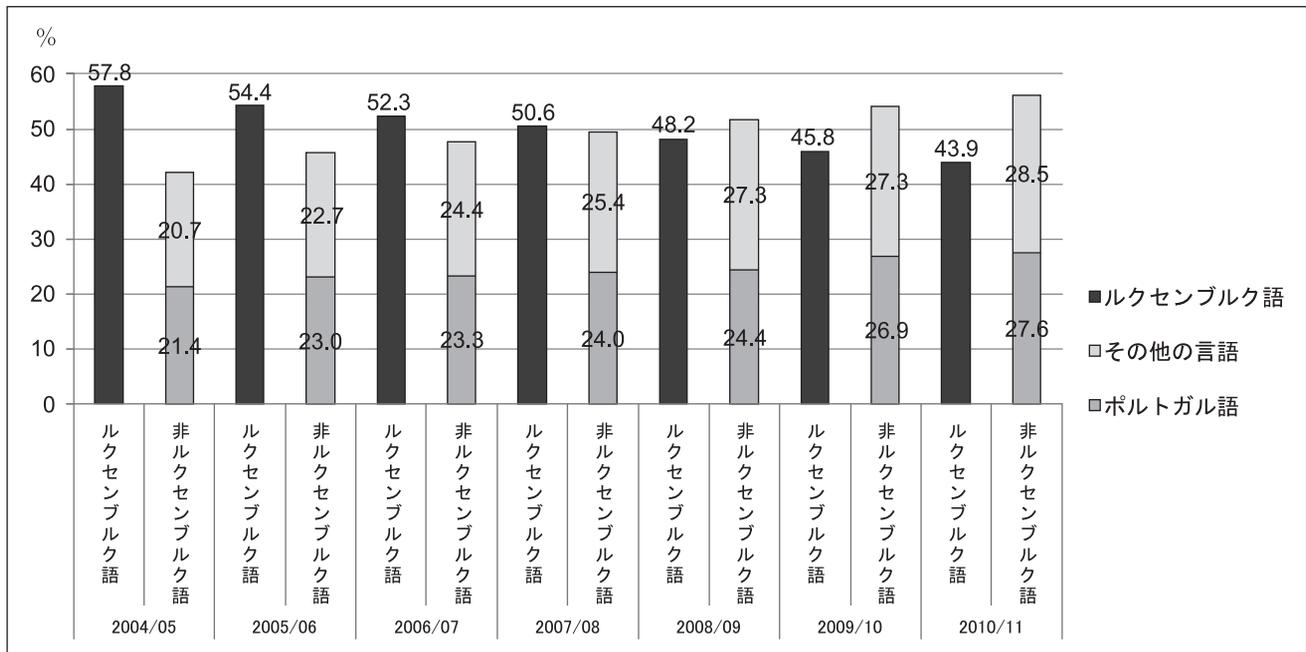


図1 小学生の母語

Quelle: Luxemburger Wort, 3.5.2012, Sp.16. 掲載にあたって筆者が体裁を変更した。

教育現場における非ルクセンブルク語話者は、外国人居住者同様ロマンス語母語話者が大半を占めると推測されるが、こういった中で、ルクセンブルク語母語話者を前提とした現行の教育制度は、大きな改革を迫られている。

ルクセンブルクでは2年間の就学前教育が義務付けられており、主としてここでルクセンブルク語を学習する。次いで初等教育開始と同時にドイツ語を、2年次の後半

くのロマンス語母語話者がドイツ語につまずき、必然的に授業内容の理解にも支障をきたす。この傾向は学年が上がるにつれてより顕著になり、両者の進学率には大きな差が生じている (Vgl. Davis 1994)。非ルクセンブルク語母語話者がルクセンブルク語母語話者を上回っている今日、ドイツ語を中心とした教育システムは過半数の生徒にとってすでに不適切なものとなっているのである。この問題への対策として検討されているのが、ドイツ

語ではなくフランス語で授業を行うフランス語コースの創設である（Vgl. Weber 2007）。ロマンス諸語を母語とする生徒は家庭でも社会でも母語と並んでフランス語を使用することが多く、マスメディアを通して学習する機会にも恵まれている。したがって、ルクセンブルク語母語話者がドイツ語によって識字を行うのと同様に、フランス語を非ルクセンブルク語母語話者の識字言語にするべきだというのが推進派の見解である。これに対し反対派は、フランス語コースの設置によって、ドイツ語コースを受講した三言語併用者とフランス語コースを受講したフランス語話者に国民が二分され、最終的に三言語併用というルクセンブルクのアイデンティティを喪失することになると懸念している（田村 2010: 39f）。すでにいくつか実験的なプロジェクトが行われているが、ドイツ語コースとの学力差は解消されず、望ましい成果は得られていない（ebd.: 34）。また、外国人居住者団体からもドイツ語コースを選択した同級生との乖離を懸念する意見が出されており（ebd.: 39）、フランス語一本化への危機感是非ルクセンブルク人の側にも存在している。こういった状況に対して、高橋（2012）は、外国人の増加によってフランス語の比率が高まると、フランス語への偏重を修正する社会的な力が作用し、三言語主義のバランスを保つべくルクセンブルク語の会話力がこれまで以上に求められるようになって考えている（70）。あるいは、授業言語にフランス語を導入するのではなく、語学学習を改善しドイツ語の学習成果を上げることで学力を向上させるという視点から、ギレスはドイツ語とルクセンブルク語を比較する授業方法に着目している（2009b: 188）。ルクセンブルク語は、ドイツ語の能力不足による学習の障害を補うため実質的には非公式の授業言語となっている（Gilles 2009b: 188, Berg 1993: 34, Davis 1994: 98ff）。ロマンス語母語話者にとってはルクセンブルク語も第一言語ではなく系統的にも遠いが、義務教育である幼稚園で集中的に教えられることから、友人間での会話を通して比較的身につけていると考えられる<sup>11)</sup>。しかし、いずれの方法をとるにせよ、まずは現行のルクセンブルク語学習を見直し、授業言語、識字言語としての水

準を満たすことが先決である。この点については、3章2節にて再度論ずる<sup>12)</sup>。

## 2.2 越境通勤者

続いて、ゲッツィンガーが指摘する越境通勤者について述べる。次の表1は、ルクセンブルク国内に住居を持たない労働者の数を居住国別に示したものである。

外国人居住者と同じく越境通勤者も増加の一途をたどっており、2011年には人口約52.5万人に対し、その約3割に相当する15.4万人が国外から通勤している<sup>13)</sup>。なかでもフランスからの通勤者が圧倒的に多く、他の二カ国の2倍に相当する。ベルギーからの通勤者に関しても多くが国境を接するフランス語圏から通勤していると考えられ、越境通勤者においてもフランス語との強固なつながりがうかがえる。

さらに、2011年度の資料では、ルクセンブルク人29.5万人に対し、外国人居住者と越境通勤者の合計が38.4万人となり、昼間人口では外国人がルクセンブルク人を上回る。つまり、外国人とのコミュニケーションはほぼ不可避であり、とりわけ外国人労働者の大半がロマンス語圏出身者であることから、結果としてフランス語を多用することになる。ルクセンブルク人は相手の言語に合わせるという受動的な姿勢をとっていることから、フランス語話者を中心とする外国人労働者の増加が、ルクセンブルクにおけるフランス語使用の拡大を引き起こしている。

## 2.3 リングア・フランカとしてのフランス語

以上のことは、言語使用に関する実証的研究によって裏付けられている。

バレヌ調査（*Le Sondage "baleine"*）は、ルクセンブルク大学フェルナン・フェーレン教授を中心に、ルクセンブルクの言語状況を社会言語学的視点から分析する目的で行われた言語調査である。このうち、使用言語を回答者の国籍別にまとめたものが表2である。上段が1997年、下段が2004年の結果を示している。

この表が示す通り、ほぼすべての回答者がフランス語

表1 定住していない被雇用者の居住地

	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年
フランス	57.8	60.6	64.1	68.6	72.8	72.7	74.1	76.3
ベルギー	30.1	31.5	33.1	35.1	37.2	37.4	37.8	38.9
ドイツ	23.3	25.9	28.8	31.8	35.3	36.5	37.5	38.9
合計	111.1	118.1	126.1	135.5	145.3	146.5	149.4	154.2

(1000人)

Quelle: ルクセンブルク統計局（STATEC）の *Luxemburg in Zahlen 2007* から 2012 をもとに筆者が作成した。年度によって数値が異なる場合は、最新のデータを用いた。

表2 国籍別 言語使用（上段が1997年，下段が2004年）

(回答者数) 国籍	ルクセンブルク語	ドイツ語	フランス語	英語	ポルトガル語	イタリア語	スペイン語	フラマン語	その他
<b>ルクセンブルク人</b>	99%	96%	96%	64%	5%	22%	6%	7%	-
(975人/1044人)	99%	99%	99%	80%	11%	32%	18%	12%	5%
<b>ポルトガル人</b>	29%	27%	98%	20%	100%	18%	17%	1%	-
(330人/298人)	50%	39%	98%	38%	100%	25%	29%	2%	4%
<b>その他</b>	79%	85%	94%	66%	0%	32%	0%	0%	-
(697人/366人)	62%	68%	97%	77%	16%	45%	28%	23%	19%
<b>合計</b>	80%	81%	96%	57%	18%	25%	9%	8%	-
(2002人/1708人)	82%	81%	99%	72%	28%	34%	22%	13%	7%

Quelle: Fehlen (2009: 77), Tableau 6, 7. 掲載にあたって筆者が体裁を変更した。

表3 国籍別 外国語の有効性（2004年）

国籍	ルクセンブルク語	ドイツ語	フランス語	英語	ポルトガル語	イタリア語	スペイン語	その他
<b>ルクセンブルク人</b>	8%	74%	92%	81%	19%	14%	17%	10%
(回答者数: 1018人)								
<b>ポルトガル人</b>	45%	43%	84%	60%	21%	9%	14%	18%
(回答者数: 292人)								
<b>その他</b>	37%	62%	63%	77%	11%	15%	17%	18%
(回答者数: 355人)								
<b>合計 (1665人)</b>	<b>20%</b>	<b>67%</b>	<b>84%</b>	<b>77%</b>	<b>18%</b>	<b>13%</b>	<b>17%</b>	<b>13%</b>

Quelle: Fehlen (2009: 124), Tableau 33. 掲載にあたって筆者が体裁を変更した。

を使用している。ルクセンブルク語，ドイツ語，その他の言語は必ずしもあらゆる国籍で使用されているとは言えず，フランス語がすべての国籍に共通する言語であることが確認できる。ルクセンブルク人は三言語の使用が等しく，とくにフランス語を多用しているということはない<sup>14)</sup>。全体として，三言語に関しては7年間でほとんど変化がなく，英語がプレゼンスを増しているが，その他の外国語も軒並み増加しており，ルクセンブルク社会全体が多言語化していると言える。

次に，これらの言語を有効性 (utilité) の観点で評価すると表3のようになる。

前表の使用状況より数値は下がるものの，有効性に関

してもフランス語に対する支持は変わらない。特にルクセンブルク人の場合，ルクセンブルク語がわずか8%である<sup>15)</sup>のに対し，フランス語は92%となっている。一般的に外国人同士の媒介言語となる英語は，合計でドイツ語を上回っているがフランス語より低く，ここでもすべての国籍に通用する言語としてフランス語が認識されていることが読み取れる。ただし，ポルトガル人はフランス語の有効性が高くドイツ語とルクセンブルク語がほぼ同じだと考えているのに対し，その他の外国人では英語が最も高く，フランス語とドイツ語の有効性がほぼ等しくなっている。使用状況を調べた前表でも，その他の外国人がルクセンブルク語，ドイツ語，英語の使用も比

表4 居住地別 越境通勤者が仕事上もっともよく使う二つの言語

居住地	ルクセンブルク語	ドイツ語	フランス語	英語	その他	使わない	回答者数
<b>もっともよく使う言語</b>							
フランス	2%	1%	89%	6%	2%	-	1079
ベルギー	10%	4%	78%	8%	0%	-	760
ドイツ	26%	61%	7%	6%	0%	-	631
<b>2番目によく使う言語</b>							
フランス	11%	13%	8%	23%	7%	38%	1079
ベルギー	10%	9%	15%	29%	6%	30%	760
ドイツ	16%	24%	18%	21%	2%	19%	631

Quelle: Fehlen (2009: 162), Tableau 43. 掲載にあたって筆者が体裁を変更した。調査は2003年12月に実施されたもの。

較的高いのに対し、ポルトガル人はフランス語の使用が突出している。外国人集団として最大のポルトガル人は、その他の外国人に比べ、フランス語への依存が高いと推測される。

次は、越境通勤者である。表4は、越境通勤者が仕事上最もよく使う言語について回答したものである。三者とも共通して、居住地の言語が圧倒的である<sup>16)</sup>。二番目によく使う言語としては英語が高くなっているが、一目的の言語以外使わないという回答も多く、同じ外国人労働者であってもルクセンブルク居住者と比べて多言語性が低くなっている。フランス人とベルギー人には共通性が見られ、高い割合でフランス語を用いている一方、それぞれ38%、30%が、それ以外の言語は使わないと回答しており、ルクセンブルクにおけるフランス語の利便性の高さがここでも表れている。これに比べるとドイツ

人のドイツ語使用はやや少ないが、ルクセンブルク語を最も使うという回答も少なからずあり、両言語の近さがうかがえる。

一般に外国人間の媒介言語として考えられる英語については、次の通りである。2004年の段階で回答者の72%が英語を使用していると回答し（表2）、77%が英語は有効だと判断している（表3）。これはフランス語に次いで高く、ドイツ語よりも有効であると考えられている。このように、英語についてはルクセンブルク人も外国人もおおむね高い評価をしているが、しかし労働言語として重要な役割を担っているわけではない（Davis 1994: 68ff）。越境通勤者の使用言語を聞いた表4では、ほとんどがフランス語かドイツ語を使用し、英語はそれほど使用されていない。また次の図2は、仕事上不可欠な言語について私企業（privé）、公企業（public）別にグラフ化したものである。具体的な数値が記されていないが、私企業、公企業ともにほぼ必須とされているのがフランス語である。公企業においてはルクセンブルク語も需要が高い。公用語の三言語に比べると英語の需要はそれほど高くないが、私企業においてはドイツ語、ルクセンブルク語とほぼ同じ割合となっている。公企業は比較的多言語であるが、私企業ではフランス語の需要が高く、ルクセンブルク語、ドイツ語、英語はその半分程度しかない。日常生活においてもビジネスにおいても重要なのはフランス語であり、英語はあくまでその他の言語と同程度に位置づけられている。

ルクセンブルクにおいて、フランス語はルクセンブルク人と外国人に共通する唯一の言語である。まさにフランス語は、ルクセンブルク人も含めたルクセンブルクにおけるすべての人の共通語リngua・フランカ（Lingua franca）<sup>17)</sup>である（Vgl. Weber 2009: 106f, Gilles 2009b: 194）。したがって、三言語併用とはいうものの、実際には仕事も日常生活もフランス語の能力に左右される。言

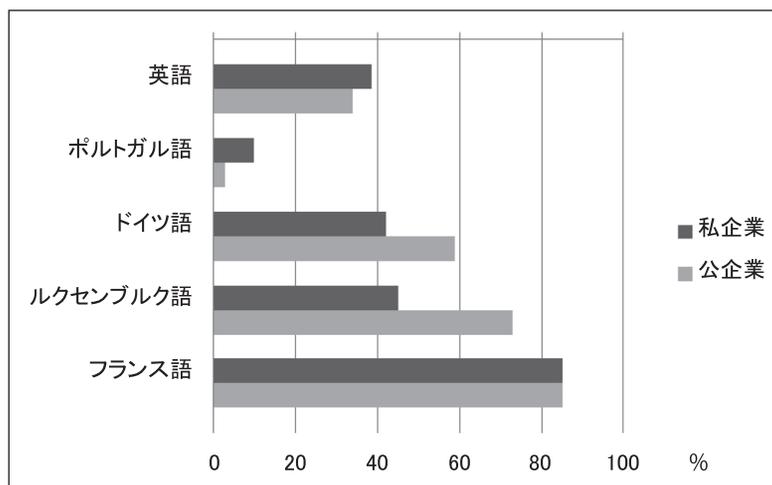


図2 企業別 仕事上不可欠な言語

Quelle: Fehlen (2009: 159), Glaphique 31. 掲載にあたって、筆者が体裁を変更した。

い換えれば、フランス語さえできればドイツ語やルクセンブルク語ができなくても問題がないということである。

### 3. ルクセンブルク人のフランス語使用

以上より、ルクセンブルク人は相手の言語に合わせるという受動的な立場をとっていることから、ロマンス語話者を中心とする外国人労働者の増加に比例して多くの場面でフランス語が使用され、事実上の共通語となっていることが分かった。これに対し、本章ではルクセンブルク人の側から見たフランス語使用について述べる。

第2章冒頭において、ノイハウゼンはフランス語がルクセンブルク人と外国人の媒介言語となっていることを指摘し、その理由として、外国人労働者の大半を占めるロマンス語圏出身者にとっての使いやすさを挙げていたが、さらにもう一つ、ルクセンブルク人自身が外国人とフランス語で話したがる傾向にあるとも述べている (Neuhausen 2001: 25)。ルクセンブルク人が好んでフランス語を使う理由は二つある。第一に、フランス語に対して好意的な言語観を持っていること、第二に、ルクセンブルク語の普及に消極的なことである。

#### 3.1 フランス語に対する肯定的な言語観

バレヌ調査の『言語に対する態度』(Fehlen 2009: 189ff) は、各言語に対するイメージを問うものである。回答者は国籍別に分けられ、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語、英語の四言語について、観点別に最高1から最低10の10段階で評価し、その平均を数値で表す。すなわち、数値が小さいほどポジティブな評価となり、逆に大きいほどネガティブな評価となる。その結果、ルクセンブルク人が各言語の有用性 (Utilité) について1 (役立つ: utile) から10 (役立たない: superflu) で評価したところ、フランス語および英語が1.7ともっとも高く評価され、次いでルクセンブルク語が2.1、ドイツ語が2.5であった。これに対し、親密さ (familiarité) ではルクセンブルク語が1.3ともっともなじみがある (familier) とされ、ドイツ語とフランス語がそれぞれ2、2.1とほぼ同じ値であった。公用語でない英語は3.9と他の三言語に比べるとやはりなじみがない (étranger) という結果になった。美しさ (Beauté) という観点では、最も美しいと評価されたのがフランス語の2.1で、ルクセンブルク語2.5、英語2.8と続き、大きく離れてドイツ語が4という結果になった。言語的にはかなり近い関係にあるルクセンブルク語とドイツ語だが、ルクセンブルク人の受け取り方は大きく異なるようである。ところが、現代性 (Modernité) という観点では、英

語 (2.6)、フランス語 (3.4) の順に現代的 (moderne) であるのに対し、ルクセンブルク語とドイツ語がそれぞれ4.2、4.5と同程度に古臭い (vieillot) と評されている。最後に洗練度 (Culture) について見てみると、もっとも洗練されている (cultivé) のはフランス語の2.1で、以下ルクセンブルク語が3、英語が3.1、ドイツ語が3.7となっており、美しさと同じような結果になっている。

以上をまとめると、ルクセンブルク人にとってフランス語は洗練されていてかつ実用性も高い言語であるのに対し、ドイツ語は公用語ゆえの親密さ以外、あらゆる点で低い評価となっている。ドイツ語とフランス語は公用語における外国語として等価値のはずだが、大きく評価が分かれている。また、一般的に外国人との媒介言語とされる英語は、有用で現代的ではあるが洗練度や美しさの点でフランス語、そして僅差ながらルクセンブルク語にも劣るとみなされている。英語とフランス語を比べると、有用性の点では等しいが、ルクセンブルク人には英語の方が現代的であると考えられている。一方、言語的な美しさ、洗練度の点ではフランス語が勝っており、親密さに関してもフランス語は英語よりはるかに身近な言語として捉えられている。ルクセンブルク人にとって、フランス語はどの言語よりも評価が高く、あらゆる観点において好印象である。ここからは、フランス語使用に否定的な要素は見いだされない。

このような好意的な言語観が生まれた背景には、いくつかの要因がある。

まず、公的な言語としての役割が今もなお引き継がれていることである。フランス語は歴史的に指導者層の言語として用いられてきたことから、今日でも唯一の立法の言語であり、行政機関の中心的な言語となっている。たとえば、省庁の正式名称は原則としてフランス語の表記であり、ほとんどがホームページをフランス語でのみ作成している<sup>18)</sup>。こういった環境が、個人のレベルでもフランス語を、対外的に用いる言語、ルクセンブルクの三言語を代表する言語としている。庶民の言語であったルクセンブルク語、ドイツ語と比べると、フランス語は「ハレの言語」「余所行きの言語」と言える。

第二に、フランス語がルクセンブルク人にとって一種の社会的ステータスとなっている点である。初等教育の授業言語がドイツ語であるのに対し、高等教育ではフランス語が授業言語となるため、フランス語の能力は教育水準の高さとみなされる。ルクセンブルク語母語話者にとって系統の異なるフランス語は習得が難しく、その点でも能力が高く評価される。ルクセンブルク人はドイツ語の使用に関しては比較のおおらかであるが、フランス語の正確さには厳しく、規範からの逸脱は能力不足とみなされる (Fehlen 2009: 49, Neuhausen 2001: 89)。し

たがって、富裕層や知識人ほどフランス語を好み、ステータス・シンボルとして用いる（Neuhausen 2001: 41）。その反対に、労働者階級の子供は親のフランス語能力が低く、フランス語母語話者との接触が限られていることから、他の階層の子どもよりもフランス語の習得が難しい。そのため、社会的に上層の言語であるフランス語に対しネガティブな反応をする傾向が見られる（Davis 1994: 155ff）。これは、ロマンス語母語話者の子どもにとってのドイツ語と全く同じ構図である。ただし、ここで取り上げられているフランス語への反発は、フランス語の持つステータスに対してであって、外国人労働者に対してではない。社会階層とフランス語の能力が密接に結びついているからこそ、フランス語に対する苦手意識やコンプレックスの裏返しとして、あるいはフランス語の能力に代表される中流以上への反発として、フランス語に対しネガティブな反応を示すのである。

最後に、フランス語の持つ格調の高さや様式美とも言うべきものである。この特質を表しているものの一つが、新聞に出される死亡の公示である。今日、死亡の公示には主としてフランス語かルクセンブルク語が用いられるが、ルクセンブルク語がルクセンブルク人のアイデンティティを示すものとして比較的最近用いられるようになったのに対し、フランス語は荘厳さとスタイルを備えた言語として以前から用いられていた<sup>19)</sup>。この感覚は、公的な言語としてのフランス語に由来し、美しく洗練された言語という言語観が反映されている<sup>20)</sup>。

このようなフランス語への信頼と presteege の高さは、ドイツ語の書きことばへの干渉（Neuhausen 2001: 85f）、とりわけ新聞のドイツ語文中での使用（Berg 1993: 143f）といったかたちで表れている。一方、ルクセンブルク語も語彙、語法、構造的特徴をフランス語から借用しており（Goetzinger 2003: 46）、ルクセンブルク語の語彙が存在しない場合にはフランス語の専門的な知識で代用する（Fehlen 2009: 47ff）など、フランス語と密接な関係にある。逆に、両言語からフランス語の書きことばへの干渉も多少見られるが、社会に浸透するのはわずかである（Neuhausen a.a.O.: 89ff）<sup>21)</sup>。ルクセンブルク人はフランス語を高く評価しており、この肯定的な言語観がルクセンブルク人の積極的なフランス語使用の動機となっている。

### 3.2 「国語」ルクセンブルク語の問題

フランス語に対する信頼とは対照的に、ルクセンブルク語に対するルクセンブルク人の評価には大きな矛盾がある。バレーヌ調査の『言語に対する態度』では、現代性の評価がやや低い以外おおむね好意的に受け止められており、とくに有用性についてはドイツ語の 2.5 を上回る 2.1 という結果になっている。ところが、表 3 では、

ルクセンブルク語が有効であると回答したのはわずか 8%にとどまり、ポルトガル人の 45%、その他の外国人の 37%と比べて極端に低い。この対照的な結果は、ルクセンブルク人にとってのルクセンブルク語と、外国人も含めたルクセンブルク社会にとってのルクセンブルク語、すなわち母語としてのルクセンブルク語と国語としてのルクセンブルク語の相違から生じていると考えられる。

そもそもルクセンブルク語とは、西中部ドイツ語のモーゼル・フランケン方言が、国家の独立を契機に独立した言語として整備されたものである。長らくドイツ語の方言と認識されていたが<sup>22)</sup>、19世紀後半から国民国家として成立する過程で国家の牽引者（Gilles 2009b: 186）に押し上げられ、第二次世界大戦後は国語として独立の象徴とみなされている<sup>23)</sup>。だが、ルクセンブルク語は今日もなお「話しことばとしてのルクセンブルク語」の域を脱していない。若者を中心に Eメールや SMS などの新しいメディアで書きことばとして用いられる（Gilles 2009a: 167）<sup>24)</sup>ものの、基本的には口頭コミュニケーションでのみ使用される。これには大きく分けて二つの理由が考えられる。一つには、ルクセンブルク語が高いレベルでの書きことばに対応できていない点である。上述の通り、ルクセンブルク語はもともとドイツ語の一方言であったものが、国境によって隣接する地域と隔てられ、別の言語として整備されたものである。同様の事例としてオランダ語が挙げられるが、オランダ語と違ってルクセンブルク語はドイツ語と併用されるため、オランダ語のように大きく離れることが難しい。そのため、方言であったころには存在しなかった語彙や抽象的な表現等が十分に整備されておらず、ドイツ語やフランス語からの借用によって補われている<sup>25)</sup>。ギレス／ムーランは、「多言語共同体の一部であり、きわめて近い関係にある十分に成長した標準語（訳注：ドイツ語）とダイグロニア関係にあるルクセンブルク語のような小言語は、英語やフランス語、スペイン語のような世界語と同程度まで標準化することは不可能だ」と考えている（Gilles/Moulin 2003: 322）。二つ目の理由は、教育上の問題である。すでに述べたとおり（第 2 章 1 節参照）、ドイツ語、フランス語は早い段階から教育が開始され、多くの時間が割かれる一方、ルクセンブルク語は週 1.5 時間にすぎず、その時間さえドイツ語の学習に費やされるという報告もある（Berg 1999: 34）。学習者にとっても、世界的な大言語であるドイツ語、フランス語の有用性に比べ、国内でのみ有効なルクセンブルク語を学習する強い動機は生じにくい。ルクセンブルク語は消滅の危機にあるわけではなく、家庭内および就学前教育において教えられる範囲で十分だと判断されているのである。教育制度において継子扱い（Gilles 2009b: 188）のルクセンブ

ルク語は、外国人向けの教育システムも十分に整備されておらず、ルクセンブルク語をルクセンブルク人と外国人の媒介言語とするのは困難である。ルクセンブルク人としては、学習時間の拡大や外国人向けの語学コースの設置に労力を払うよりも、互いの共通語であるフランス語を使用する方がはるかに合理的で現実的なのである。

ルクセンブルク人自身がルクセンブルク語の使用拡大に積極的でないことは、帰化要件にも表れている。2008年より施行されている国籍取得に関する法律<sup>26)</sup>では、言語能力について次のように定められている。すなわち、ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語のうち少なくとも一つについて十分な能動のおよび受動的な知識をもち、またルクセンブルク語について、聞き取りが欧州共通参照枠<sup>27)</sup>のB1、会話がA2以上でなければならない。A2、B1はそれぞれ6段階中のレベル2および3であり、決して高い能力とは言えない。国籍取得の条件としてルクセンブルク語の要求レベルが低く、しかも口頭での使用のみに限定されているのは、ルクセンブルク人自身の現状を鑑みてのことである。むしろ、ルクセンブルク固有の言語であるルクセンブルク語の習得を要求しつつも、それ以上に三言語併用の維持に重きを置いていることが、この法律から読み取れる。

### 3.3 外国人をめぐる環境の変化

これらの要因と並び、外国人の捉え方に変化が生じていることも、ルクセンブルク人のフランス語使用を促進する遠因となっている。外国人労働者（Gastarbeiter）は、もはや単なる「客（Gast）」ではなく、ルクセンブルクの労働力の中核をなしていると言っても過言ではない。

第一に、労働人口の問題である。労働人口に占めるルクセンブルク人の割合は2000年の段階で40%を割り込んでおり、半分以上を外国人居住者と越境通勤者が担っているのが現状である。外国人居住者の労働者数および越境通勤者数は年を追うごとに増加し、2004年の段階では越境通勤者が労働人口として最も多くなっている。2004年の失業率は5.0%（2011年は5.7%）となっており、外国人労働者がルクセンブルク人の雇用を圧迫しているという批判は当たらない（Allegrezza et al. 2005: 10）。

第二に、少子化による人口の減少である。1990年の段階ではルクセンブルク人の生産児数が外国人の2倍となっているが、2000年にはルクセンブルク人と外国人の生産児数はほぼ同数となり、2005年には外国人がルクセンブルク人を上回っている。その後両者ともほぼ横這いが続き、2010年には再びルクセンブルク人が外国人を逆転した。とはいえ、1990年の状態には及ばず、全体の生産児数の半分を外国人が占めていることに変わ

りはない。今後、ルクセンブルクの労働力人口の少なからぬ割合をルクセンブルクで生まれ育った第2、第3世代が占めるようになると考えられる。

さらに、少子化は年金制度と無関係ではない。環境省に提出された報告書（Schepelmann 2002: 10）によると、1995年の時点で、仮に現在の状況が続けば、数十年のうちに人口が70万人に達するとルクセンブルク統計局が試算している。続いて2000年には、当時首相であったジャン＝クロード・ユンカーが、手厚い社会福祉政策は高い成長率によってのみ実現可能であり、高い成長率を実現するためには人口70万人の突破が不可避である、と発言している。ルクセンブルクの人口は1991年時点で38.4万人、その10年後には43.9万人、さらにその10年後には51.2万人と順調に増加しているが、それと並行して外国人比率も29.4%、36.9%、43.0%と上がり続けている。近年ルクセンブルク人の生産児数が持ち直しているとはいえ、外国人の生産児数もほぼ同じ水準にあり、堅調な外国人比率の上昇率を踏まえると、この発言は明らかに外国人の存在を念頭に置いている。人口が70万人に達するころには、ルクセンブルク人が自国の中で少数派となっている可能性は否定できない。それでも、ルクセンブルク人だけでは労働力を賄うことも社会福祉制度を維持することもできず、外国人労働者の受け入れが必須となっている。そのため、これからのルクセンブルクに求められるのは、彼らを一方的に統合することではなく、互惠関係を築くことである。こういった危機感も、ルクセンブルク人の言語使用に影響していると考えられる。

## おわりに

ルクセンブルクでは人口の半数近くを外国人が占め、そこへ越境通勤者が加わることで昼間人口では外国人労働者がルクセンブルク人を上回っている。彼らの多くはロマンス語圏出身者であることから、ルクセンブルクにおいてはフランス語を多用している。外国人とのコミュニケーションに際しルクセンブルク人は相手の言語に合わせるというスタンスに立っているため、結果的にロマンス語圏出身者の多さに比例してフランス語の使用頻度が高まっている。この相手の言語に合わせるという姿勢は、フランス語だけでなくドイツ語や英語など自身が習得しているすべての言語にあてはまる。ただし、フランス語については、他者から要求されるという外的な要因に加え、ルクセンブルク人の側から生じる内的な要因も存在する。すなわち、ルクセンブルク人はフランス語に対して肯定的な言語観を持っており、通常は相手の言語に合わせるという受動的な姿勢をとっているが、フラン

ス語使用に関しては、ルクセンブルク人の側からも能動的に働きかけている。したがって、ロマンス語母語話者を多く含む外国人労働者の増加がフランス語使用の拡大の直接的な原因であるとしても、ルクセンブルク人自身もフランス語の使用に強い動機を持っているのである。

ただし、いくらフランス語を話す用意があるとは言え、ルクセンブルク語で話しかけた相手に „Parlez français!“ (「フランス語で話してください!」) と返されるのを不公平に感じていないわけではない (Goetzinger 2003: 48)。また、日々高まるフランス語のプレゼンスに、不安を抱いていないわけでもない (Gilles 2009b: 191)。しかし、こういう場で大切なのは純粋な語学力ではなく、むしろ複雑なコミュニケーションを回避する能力であると、ゲッツィンガーは主張する。つまり、ここで使用されるフランス語は、ルクセンブルク人と外国人の仲立ちとなる中立的な媒介手段であり、規範的なフランス語ではなく、むしろややピジン化されたフランス語 (ein leicht pidginisiertes Französisch) (Goetzinger a.a.O.: 48f) とみなすべきである<sup>28)</sup>。この新しい在り方は、従来のフランス語像と切り離して捉えねばならない。すなわち、今日のフランス語は「教養言語 (Bildungssprache)」と「媒介言語 (Verkehrssprache)」(Weber 1994: 140f)、あるいは「教養言語としての変種 (Bildungssprachliche Varietät)」と「日常会話の言語としての変種 (Umgangssprachliche Varietät)」(Neuhausen 2001: 105) という二つの側面を持っている。したがって、ルクセンブルク人は、教養言語を日常的に用いるというアンビバレントな感覚でフランス語を使用しているのである。

しかしながら、この使用拡大は一つの矛盾をはらんでいる。通常、使用頻度が上がり使用領域が拡大すれば言語のプレステージは上がるものだが、ルクセンブルクのフランス語は限定的であったものが日常的に使われるようになったことで、むしろプレステージが低下する傾向にある。ルクセンブルク人のフランス語に対する言語観が今後どうなるか、継続して観察する必要がある。

## 注

1. 本稿では、ルクセンブルクに居住ないし労働する人のうち、ルクセンブルク国籍の有無にかかわらず、自身をルクセンブルク人とみなさない人を指すこととする。
2. ベルギーからの越境通勤者 25.2%にも、多くのフランス語話者が含まれていると考えられる。
3. ノイハウゼン (Neuhausen: 2001)、ゲッツィンガー (Goetzinger: 2003)、ギレス (Gilles: 2009) など。
4. トラウシュ (1999) 参照。
5. 1815年のウィーン会議により、ルクセンブルクは東部の領土をプロイセンに割譲、残った部分が大公国に格上げされた上でオランダ王ウィレム1世に個人の所有地として譲渡された。そのため、ルクセンブルクは独立した国家でありながら実際は新オランダ王国との同君連合であり、その主権者はあくまで国王兼大公であった。

た。この状態がベルギー革命勃発まで続く。

6. 現在のベルギー、リュクサンブール州 (州都アルロン)。
7. Loi du 24 février 1984 sur le régime des langues.
8. ルクセンブルク国内に職場がありながら国外 (フランス、ベルギー、ドイツ) に居住する労働者。
9. その他、他の EU 加盟国が 10%、その他が 13.5% となっている。ルクセンブルク統計局 (STATEC) の *Luxemburg in Zahlen 2012* をもとに割合を算出した。
10. ベルギー人にも少なからずフランス語話者が含まれると推測されることから、実際にはより高い割合になると考えられる。
11. 2年間の就学前教育が義務化された背景には、早期にルクセンブルク語の学習を開始し、非ルクセンブルク人を社会に統合するという目的がある。
12. この他、母語や母文化との結びつきがアイデンティティの形成には欠かせないとして、外国人の子どものために「母語を教える授業」と「母語による授業」も行われている。前者は、母語を学ぶための授業であり、各国大使館が中心となって行っている。これに対し、後者は小学校の一部の科目を、授業言語であるドイツ語ではなく各自の母語で教わるものである。この取り組みは 1983 年度から始まり、当初はポルトガル語、イタリア語、スペイン語による授業が企画されたが、スペイン語は 2 年間で廃止、イタリア語も 2005 年度をもって廃止され、現在も実施されているのはポルトガル語による授業のみである。しかし、ポルトガルから招聘する教師の不足や、授業を運営するポルトガル当局とカリキュラムを管理するルクセンブルクの間摩擦など、運営上の問題を抱えている。この取り組みが難航していることも、フランス語コースの導入が求められる遠因となっている。詳しくは、田村 (2010) 参照。
13. 逆に、ルクセンブルク国内に居住し国外へ通勤しているのは、2011 年時点で 11,400 人 (うち国際機関の職員が 10,300 人) である (STATEC 2012: 12)。
14. ただしノイハウゼンは、こういった調査の場合、外国人のフランス語使用が比較的実態に即していると考えられるのに対し、ルクセンブルク人はフランス語のプレステージの高さを反映して回答が実際より高くなっている可能性があるとして、解釈に慎重な姿勢をとっている (2001: 33)。
15. 本表は国籍ごとに見た外国語の有効性 (Utilité des langues étrangères selon la nationalité) と題されているが、ポルトガル語に対するポルトガル人の回答や他の言語に対するその他の外国人の回答など、母語に相当する部分も調査の対象となっていることから、ルクセンブルクで使われるすべての言語について有効性を問うことが本調査の趣旨であると考えられる。したがって、外国語でないとの理由からルクセンブルク人がルクセンブルク語に対する回答を放棄したため回答率が下がったという可能性は排除される。ただし、表 2 にもある通り、ルクセンブルク人のルクセンブルク語使用率は十分高く (Vgl. Fehlen 2009: 156ff)、別の設問でも、多くのルクセンブルク人が、外国人居住者にとってルクセンブルク語が重要であると考えている (ebd.: 207ff)。つまり、ルクセンブルク語に対するルクセンブルク人の考え方は対象や文脈によって大きく異なり、この結果から一概にルクセンブルク語を軽視しているとみなすことはできない。
16. ベルギー人を対象としておきながらフラマン語の選択肢がないのは調査上の不備であろう。しかし、ベルギー人のその他の回答率がそれぞれ 0%、6% であることから、フラマン語の使用はさほど多くないと推測される。
17. 異なる母語を持つ人間同士のコミュニケーションで用いられる言語手段。用いられる言語は本人にとっての第二言語であり、異なる母語とは、方言レベルの相違にも言語レベルの相違にも当てはまる。

18. ただし、一部の記事がドイツ語や英語で書かれている場合がある。
19. ベルクは、1988年7月から9月までの3カ月にわたり、発行部数が多い上位二紙 *Luxemburger Wort* と *Tageblatt* の使用言語を調査した。その結果、国際面から地域面まで、見出し、小見出し、本文にわたってドイツ語の比率が圧倒的であったが、死亡の公示ではドイツ語が0.8%、フランス語が44.8%、ルクセンブルク語が54.4%であった (1993: 45)。1979年の別の調査では、フランス語の使用は80.3%と圧倒的である (ibd.: 49)。ちなみに、誕生に関する広告ではそれぞれ0.4%、18.3%、81.3%、結婚に関する広告では0.3%、19.3%、80.4%と、ルクセンブルク語が非常に高い。これは、次節で述べるルクセンブルク語の口語性や母語としての存在感が反映されていると考えられる。逆に、ドイツ語の使用が極端に少ない理由は、第二次世界大戦中ナチスによる占領を受けたため、これ以降、私的な分野ではドイツ語の使用が敬遠されている。
20. 死亡の公示と並んで求人欄でもフランス語が多用されるが、ここでは外国人労働者の存在を意識して実用性の観点からフランス語が用いられている。
21. ルクセンブルクのフランス語は、原則としてフランスの規範に則っているが、ベルギー・フランス語の用法も見られる。たとえば、相手に聞き返すとき、フランスでは“Pardon?”を用いるが、ルクセンブルクではベルギーの用法である“S' il vous plait?”も使われる (Neuhausen 2001: 90)。
22. ムーランは、ドイツ語のルクセンブルク方言 (lëtzebuergesch daätsch) から自分たちの言語 (eis sprooch) への意識の変化をパラダイムシフトと表現している (Moulin 2006: 313)。
23. ルクセンブルクは第二次世界大戦中ナチスによって占領されていたことから、ルクセンブルク語をドイツ語から切り離すことは、ルクセンブルクのドイツからの独立を宣言するという意味も持つ。
24. この傾向について、ギレスは、ルクセンブルク語が「口語的な書きことば」という新たなスタイルを獲得しつつあると考えており、このような新しいメディアが、ルクセンブルク語の書きことばとしての使用拡大に重要な役割を担うと述べている。Vgl. Gilles (2009a)。
25. フランス語からの借用等については、既述のとおり (Goetzinger 2003: 46, Fehlen 2009: 47ff)。ドイツ語からの借用等については、たとえば神学的な用語がドイツ語からの借用であったり、それをルクセンブルク語化したりしている例が見られる。なお、ルクセンブルクはカトリック教国であるが、聖典に関して公的にルクセンブルク語訳されているのは新約聖書のみである (ただし、この翻訳もバチカンには認められていない)。木戸 (2012) 参照。
26. Loi du 23 octobre 2008 sur la nationalité luxembourgeoise.
27. Council of Europe: *Common European Framework of Reference for Languages*, Cambridge, 2001.
28. ただし、ルクセンブルクのフランス語が (フランスの) 標準変種の強い影響下にあることから、本格的なビジン化の可能性は低い (Neuhausen 2001: 105)。

## 参考文献

- Allegrez, Serge/Brosius, Jacques/Gerber, Philippe/Hausman, Pierre/Langers, Jean/Schuller, Guy/Zanardelli, Mireille: *Les salariés frontaliers dans l'économie luxembourgeoise*, Luxembourg, 2005.
- Berg, Guy: „Mir wëlle bleiwe, wat mir sin“ *Soziolinguistische und sprachtypologische Betrachtungen zur luxemburgischen Mehrsprachigkeit*, Tübingen, 1993.

- Davis, Kathryn Anne: *Language planning in multilingual contexts: policies, communities and schools in Luxembourg*, Amsterdam, 1994.
- Fehlen, Fernand/Piroth, Isabelle/Schmit, Carole/Legrand, Michel: *Le Sondage “baleine”: une étude sociologique sur les trajectoires migratoires, les langues et la vie associative au Luxembourg*, Luxembourg, 1998.
- Fehlen, Fernand: *BaleineBis: Une enquête sur un marché linguistique multilingue en profonde mutation - Luxemburgs Sprachenmarkt im Wandel*, Luxembourg, 2009.
- Fehlen, Fernand: Elitensprache in Luxemburg. In: *forum* 314, Esch/Alzette, 2012. 41-46.
- Gilles, Peter (a): Jugendsprachliche Schriftlichkeit auf Luxemburgisch in den Neuen Medien. In: Wirtgen, Georges/Berg, Charles/Kerger, Lucien/Meisch, Nico/Marianne, Milmeister (S.L.D.): *Savoirs et engagements*, Differdange, 2009. 166-175.
- Gilles, Peter (b): Luxemburgische Mehrsprachigkeit; Soziolinguistik und Sprachkontakt. In: Elmentaler, Michael (Hg.): *Deutsch und seine Nachbarn*, Frankfurt a.M., 2009. 185-200.
- Gilles, Peter/Moulin, Claudine: Language Standardization in Luxembourgish. In: Deumert, Ana/Vandenbusche, Wim (Hg.): *Germanic Standardizations. Past to Present*, Amsterdam, 2003. 303-329.
- Goetzinger, Germaine: Aspekte der Sprachwahl am Beispiel der Luxemburger Polyglossie-Situation. In: Delwaide, Jacobus/Michels, Georg/Müller, Bernd (Hg.): *Die Rheingesellschaft; Mentalitäten, Kulturen und Traditionen im Herzen Europas*, Baden-Baden, 2003. 45-53.
- Moulin, Claudine: Grammatisierung und Standardisierung des Lëtzebuergesch. Eine grammatikographisch-sprachhistorische Annäherung. In: Moulin, Claudine/Nübling, Damaris (Hg.): *Perspektiven einer linguistischen Luxemburgistik: Studien zu Diachronie und Synchronie*, Heidelberg, 2006. 305-339.
- Neuhausen, Ingo: *Das Französische in Luxemburg, Eine Sprache im romanisch-germanischen Kontaktbereich*, Siegen, 2001. (Dissertation)
- Schepelmann, Philipp: *Umweltentlastung trotz Bevölkerungszuwachs? Ökologische Aspekte der Zuwanderung nach Luxemburg* (Studie im Auftrag des Umweltministeriums Luxemburg), 2002.
- STATEC LUXEMBOURG: *Luxemburg in Zahlen*, 2007-2012.
- Weber, Jean-Jacques: Rethinking Language-in-Education Policy in Luxembourg. In: *forum* 264, 2007. 24-26.
- Weber, Jean-Jacques: *Multilingualism, Education and Change*. Frankfurt a. M., 2009.
- 木戸紗織「ルクセンブルク語新約聖書の受容 — 司祭アンケートをもとに —」ルクセンブルク学研究会『ルクセンブルク学研究』第3号, 2012年, 23-43頁。
- 高橋秀彰「岐路に立つルクセンブルクの3言語主義」, 関西大学外国語学部紀要 第6号, 2012年, 59-72頁。
- 田村建一「ルクセンブルク語の標準化をめぐる問題」, 平成15年度～平成17年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書, 2006年。
- 田村建一「ルクセンブルクの多言語教育と外国人児童生徒」, ルクセンブルク語コイネー研究会『ルクセンブルク学研究』第1号, 2010年, 21-45頁。
- ジルベール・トラウシュ著, 岩崎允彦訳『ルクセンブルクの歴史 — 小さな国の大きな歴史』, 刀水書房, 1999年。

# Reasons for the Rise of French in Luxembourg: Growth of the Number of Guest Workers and the Feelings of the Luxembourgers

Saori KIDO

In the Grand Duchy of Luxembourg people use Luxembourgish, German and French, and there exists a Triglоссия. Originally French is used mainly in public, whereas in contrast Luxembourgish and German are used in private. However, according to some recent studies, French is used also when communicating with foreigners in everyday life. Foreign residents constitute 43.8% of the whole population. In addition, workers from the neighboring countries make up 30% of residents in Luxembourg. The total of these two types of guest workers is bigger than the number of Luxembourgers and the majority of the foreigners come from the Romanic languages area. Under these circumstances Luxembourgers are ready to speak the language of the partner, in order to avoid complex communication, so that French is used overwhelmingly in proportion to the increasing number of francophones. Today French is used as a lingua franca because there are a lot of francophones.

In addition to the circumstance in which communication with foreigners takes place, I focus on the Luxembourgers in this paper. French makes a favorable impression on Luxembourgers for three reasons: Firstly, French is seen as a formal language that should be used in official situations. Secondly, French language skills are considered as a kind of social status in Luxembourg. It is a status symbol of the intelligentsia and the upper levels of society. Thirdly, French is considered to have dignity. Unlike German and Luxembourgish as the “private” languages, French as a “public” language has all of these features. In a word, French in Luxembourg has a lot of prestige. And the fact that the Luxembourgers have contradictory feelings towards Luxembourgish also encourages the use of French. This new language which was/is deriving from German is the mother tongue of the Luxembourgers and the symbol of independence of the country. But Luxembourgish has at present neither sufficient technical terms nor abstract vocabulary. And the curriculum in the school isn’t sufficient, because people have little motive to learn this language which is spoken only in Luxembourg. Therefore this language is not yet suitable for communication between Luxembourgers and foreigners. In short, Luxembourgers approve the use of French strongly and are positive about displaying their competence.

In general Luxembourgers are passive when communicating with foreigners. However, when they speak French they are active and intend to show off their language skills. Therefore there are not only external factors like foreigners requesting to speak French, but also internal factors like Luxembourgers having a motive for using French.

Keywords : Luxembourg, Triglоссия, foreign residents and workers, prestige of French, communication language